



# JSSH NEWS

## 日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

### 第50回日本手の外科学会 学術集会を振り返って

会長 荻野利彦

#### 目次

- 第50回日本手の外科学会学術集会を振り返って
- 香港 Traveling Fellow 報告記
- 新特別会員紹介
- 新評議員紹介
- ハンドギャラリー(児島コレクション)
- 第7回アジア太平洋手の外科会議へのご招待
- ランチョンセミナー「手の外科における保険診療」および診療報酬に関する評議員アンケート結果についての報告
- 専門医制度に関する事務局からのお知らせ
- 『DVD 手の外科シリーズについて』
- 編集後記

第50回日本手の外科学会学術集会を本年4月19日と20日の2日間、山形市において開催いたしました。本学会の山形での開催は渡辺好博名誉教授が会長をされて以来16年振りです。このような記念すべき会をお世話させていただきましたことを大変光栄に存じております。

学術集会の会場には、過去数年間の学術集会の会場と人の集まり方を観察し、400人収容可能な会場が5会場確保できる山形国際ホテルを選びました。会場から人が溢れるのではないかと、人の移動で混乱が生じるのではないかとという不安で一杯でした。しかし、学会が終わってみると各会場の人の集まり具合も問題なく、各会場への移動も容易であったようです。複数の会場で同時にプログラムを進行了せため、希望の演題を聞けなかった方には申し訳なく思っております。

本学会のテーマは「日手会50周年記念・新たな飛躍」としました。演題採用率を高くして、なるべく多くの先生方に参加・発表いただきたいと思って目的は達成することができました。総会は昼食の時間を当てて第1、2会場を繋げて800人の会場にして、第3、4会場でも内容を聞けるようにしました。会場に昼食が用意されたことで総会の参加者が増えました。狭い会場での混乱を避けるために行ったホームページを使っての学術集会参加と受講講演の事前登録は900人の方に行っていただくことができ円滑にいきましました。

特別講演は石井清一札幌医大名誉教授にお願いいたしました。「人間の手を考える一手からみた脳とのかかわり」と言う演題で格調の高いお話しを伺うことができました。外国からお招きした方は22人でした。アメリカから9名、香港3名、韓国2名、台湾2名、フィンランド1名、タイ1名、中国1名、オーストリア1名、スイス1名、イタリア1名です。全ての方が学術集会を盛り上げようという目的で参加され、第50回の記念すべき会に花を添えてくださいました。

第50回学術集会の記念プログラムとしてシンポジウム『次世代へのメッセージ』を企画いたしました。日本手の外科学会を指導してこられました名誉会員の先生を中心に16名の先生方にシンポジストをお願いいたしました。お話しの内容は様々でしたがいずれもご自身の経験を基にされた含蓄のあるご講演で大変感銘を受けました。

その他に6つのテーマのシンポジウムを企画いたしました。これらのシンポジウムでは演者の選択、発表時間や形式などは座長の先生の裁量で決めていただき、盛り上げていただきました。

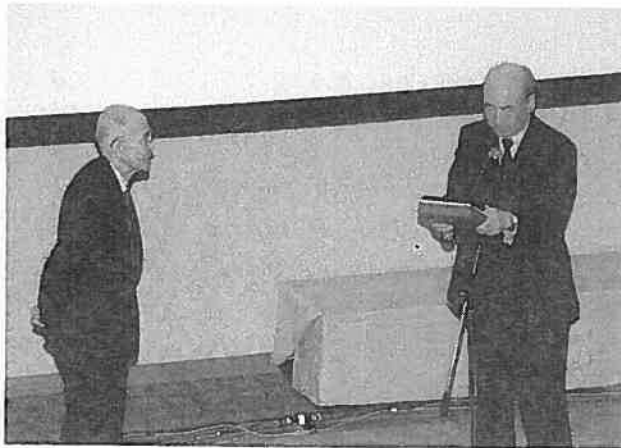
一般演題として471題の演題のご応募をいただきました。プログラム委員の先生方に査読をお願いいたしまして、そのうち430題(91%)を採用いたしました。可能な限り沢山の演題を採用するという方針で、昨年74%、一昨年85%と比べるとかなり高い採用率になりました。採用演題の内訳は、シンポジウムを含む口演演題238題(4題が海外から)、展示演題184題、ビデオ演題7題でした。展示演題の会場にも沢山の人が参加し、討論が盛り上がっておりました。学術集会は大きなトラブルもなく進行しました。

日本手の外科学会50周年記念式典と祝賀会は、前回の日手会ニュースに掲載されたように大成功のうちに終わりました。

学術集会の翌日の「国際手の外科シンポジウム・山形」には百数十人の参加者があり、討論には熱が入っていました。

今回の学会では期間中に山形で桜の花が満開になりました。学術集会の合間に流した山形の自然の写真とピアノの曲では、会場で熱心に講演を聞かれた先生方にも少しだけ、山形の香りをお楽しみいただけたと思います。本学会の開催にあたり、ご支援いただいた山形大学医学部整形外科学教室同門会を始めとする関係各位に感謝申し上げます。

来年は落合直之会長のもとに第51回日本手の外科学会が平成20年4月17日と18日につくば市/エポカルつくばで開催されます。多くの会員が参加されますことを願っております。



特別講演後の感謝状の贈呈

## 香港 Traveling Fellow 報告記

名古屋大学 手の外科 篠原 孝明

この度、第7回日本手の外科学会・香港手の外科学会 Exchange Traveling Fellow に幸運なことに選出され、2月7日から14日まで香港を訪問させていただきました。第20回香港手の外科学会は Dr. CH Yen を会長として、2月10、11日の2日間、香港大学で開催されました。今回の学会のメインテーマは paediatric hand であり、traveling professor として、大阪府立母子保健総合医療センターの川端秀彦先生とアメリカの Shriners Hospital for Children から Dr. SH Kozin が招待されていました。また、中国本土からも数名の fellow が招待されており、アジア通の戸部正博先生も参加されていました。学会の規模は日手会と比べると小さく、参加人数は150人程で、1会場のみで行われました。プログラムは Management of paediatric upper limb fracture/dislocation and their complications, Congenital anomalies of thumb, Cerebral palsy の symposium と Plenary lecture 3, Free paper session 3 の内容でした。会場内は親密な空気が流れていながら、白熱した議論が繰り広げられ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。学会以外では、香港の手の外科医が毎週行っているカンファレンスへの参加、川端先生と Dr. Kozin の供覧手術見学、Chinese University of Hong Kong, Queen Mary Hospital, Prince of Wales Hospital, Princess Margaret Hospital への施設訪問をさせていただきました。Chinese University of Hong Kong の Orthopaedic learning centre には、cadaver を用いた手術手技を習得するための教室が常設されているなど、教育設備が充実していることに感心しました。カンファレンスや訪問施設では、日本と香港のシステムの違いや治療法、手術手技について様々な意見交換をすることで、大変勉強になりました。また行く先々で、心からの歓待を受け非常に感激しました。年齢が比較的近いことから、Dr. PC Ho, CH Yen, HK Wong, WL Tse とは非常に親しく交流させていただき、また Dr. CY Lam, Boris Fung には親切に指導していただき、素晴らしく貴重な体験を通して、友好関係を築くことができました。



Welcoming Dinner にて



Orthopaedic learning centre にて  
左から筆者、川端先生、Dr. PC Ho



Princess Margret Hospital にて  
左手前から Dr. CY Lam, 筆者, Dr. HK Wong

最初は緊張しましたが、川端秀彦先生が色々と面倒をみて下さったので、自分らしく行動することができました、本当に有り難うございました。最後になりましたが、今回のフェローに推薦していただきました、名古屋大学手の外科：平田 仁教授，名古屋第一赤十字病院：堀井恵美子先生，選出していただいた中村蓼吾理事長，国際委員会の水関隆也理事，金谷文則委員長をはじめとする国際委員のメンバーの先生方に心より御礼申し上げます。

## …………… 新特別会員紹介 ……………

### 手の外科の後輩達へ伝えたいこと

聖隷浜松病院整形外科顧問

齋藤 英彦



私は恩師田島達也先生から初めて手の外科の手ほどきを受けてから、早いもので41年目になります。この間に、私自身が新潟大学や聖隷浜松病院で直接指導した医師やまた見学に来られた医師は、数えきれない程多くなっています。また、新潟手の外科セミナー、日本手の外科学会などの学会や研究会で多くの若手医師に講義をしてきました。後輩達にとって少しでも役立っていてくれれば望外の喜びであります。

立場が病院の顧問になり、今は既に職場を異にしている後輩たちの評価や噂を耳にする機会が増えています。頑張っていて、聞いていて嬉しくなるような評価を受けている人も多い一方、あの人がどうしてと思う位失望させられることもあります。この機会に手の外科を専攻している後輩達に、いくつかのことを伝えておきたいと思います。

#### 必要条件・十分条件

手術の技術が大きな割合を占める手の外科においても、診断技術は大変重要であります。どんなに素晴らしい手術をしても、診断が間違っていたのでは、患者を治してやることはできません。正しい診断を下すには、必要条件としての症状の存在と、鑑別診断につながる十分条件としてのいくつかの要件を満たしている必要があります。肘部管症候群を例にとれば、尺側指や手の尺側に感覚低下（必要条件）があったとしても、前腕に明らかな感覚低下があれば肘部管症候群では説明が付きません。前腕の感覚検査をやらなければ、そのことに気付かないまま、ことが進んでしまうかもしれません。正しい診断をつけたと思っても、症状が回復してくるのを確認できる十分な期間、経過観察をする必要があります。

#### 自分の技術に溺れない

他院で手の外科医から肘部管症候群に対する手術を受けたが症状が改善しない症例が来院しました。前の病院でやられたと同じ神経剥離術の適応がついて入院して来ました。自分の技術が先輩の手の外科医より優れていると思ってのことでしょうか。前医の手術でなぜ改善しなかったのか、別に原因があるのではないかと考える謙虚さがあってしかるべきでしょう。この症例は頸椎症を合併していることが判明して、頸椎の手術で症状が改善しました。

#### 教科書にも間違った記載はある

Finkelstein testはde Quervain病の診断手技ですが、いくつかの教科書に「親指を屈曲，内転して手

掌内に入れ、その上から四本の指を握って、手首を尺屈する」と書かれています。しかし、この手技では正常手でも橈骨茎状突起部に痛みが誘発されます。Finkelstein 自身の論文には、「患者の母指を検者の手で把持して手関節を尺屈する」とあります。古くからの検査法や手術法を引用する時には、必ず原著を読む習慣を身につけて欲しいと思います。

#### 必要は発明の母なり

中手骨短縮症に対する掌側アプローチは、結婚を控えていた女性の切なる願いを叶えるために考えた手術法であります。限られた期間内に、癍痕が目立たないように手術をする必要がありました。中手骨の手術に対する背側アプローチの選択は医師の立場からすれば当然ではありますが、cosmetic surgery の意味合いの大きいこの手術で手背の癍痕が目立ったのでは、手術する意味がありません。

名の通った琴の奏者が de Quervain 病で紹介されてきました。琴の演奏では母指の橈側外転が強いらられるので、腱鞘切開によって APL 腱が腱鞘から脱臼したらトラブルのもとになります。この腱鞘炎は第 1 背側区画に隔壁がある症例に多く、かつそのような症例のほとんどが EPB 腱だけの腱鞘炎であることもわかっていました。EPB 腱の腱鞘だけを開放した初めての症例でした。いわゆる「常識」や伝統的な手術法を超えるには、理論や臨床経験に裏打ちされた勇気が要ります。

## 日本手の外科学会 新特別会員の挨拶

医療社団法人進藤病院 整形外科

平山隆三



この度日本手の外科学会特別会員にご推挙いただき大変光栄に存じます。私は昭和42年広島大学を卒業、北大での1年間のインターン実地修練、昭和43年広島大学整形外科入局、津下健哉教授に師事し整形外科学、手の外科学、そして生田講師（後に広島大学教授）に microsurgery の基礎および臨床を学びました。昭和49年には仏国 Nancy 大学 Michon 教授の基に留学、約1年間、形成運動機能再建学、microneurosurgery を研修、その間 C. Verdan, A. Narakas, D. Buck-Gramcko, R. Tubiana, E. Moberg 先生らのヨーロッパの偉大な手の外科医のクリニックを訪問、外来、手術見学、カンファランスなどに参加し、彼らの技量、技術、手の外科学に対する考え方、ヨーロッパの感性、個人主義的考え方を勉強しました。その後新設旭川医科大学にて手の外科学の研究、臨床、教育に携わり今日に至りました。主な基礎的研究は末梢神経の再生、臨床的研究は頸髄損傷麻痺手、末梢神経損傷麻痺手の機能再建、Monteggia 脱臼骨折、先天形成障害手の治療等でした。

手の外科学に惹かれた点は学生時代、大学院時代に手の外科学の世界的権威であります津下教授に直接、ご教示ご指導をいただいたこと、手の外科が形成、機能再建外科学であるということでした。特に教授から「手の外科をする心」を学んだこと、「手の外科は知識ではない、知識と訓練（即ち智慧）により裏付けされた技術（art）である。」という考えに感銘を受け手の外科学を学ぶ決心をしました。手の外科の手術には絶対的適応は殆どありませから結果は外科医の技量に委ねられている部分が多くありそこがより魅力的でした。科学的根拠に基づき手術手技を磨き良結果を得ることはことが即患者さんの悩みの解決に繋がる事と同時に創意工夫により術式の考案者よりも優れた成績を上げることは特に喜びでした。また新しい術式の開発は知的虚栄心を擲ります。しかし臨床においての術式の開発は無から有を生むこと困難で、既にある二つ以上の既成事実の良いところの組み合わせによって生まれます。手の外科専門医制度発足に当たり個人の修得した技術が正確に評価され個人の使命感、誇りに繋がることを期待しています。

## 日本手の外科学会特別会員に推挙されて

鈴鹿回生病院名誉院長，  
常葉学園浜松大学健康プロデュース学部教授  
藤澤 幸三



この度、伝統ある日本手の外科学会特別会員にご推挙いただき身に余る光栄であり、会員の皆様、また学会役員の方々に感謝申し上げます。さらに学会創立50周年記念の年度にこの榮譽に浴したことは二重の喜びでもあります。振り返りますと私の整形外科医としての半生は手の外科と共にありました。三浦隆行名大名誉教授の手術を見せていただいたのが始まりで、東海手の外科CCでは矢部 裕慶應義塾大学名誉教授（当時名古屋保健衛生大学教授）木野義武先生、中村蓼吾現理事長の皆様から手の外科の基本、イロハをご指導いただきました。その後恩師である故鶴田登代志三重大名誉教授の親書、紹介状をいただき広島大学を訪れ津下健哉名誉教授、生田義和名誉教授のご指導をいただき、ますます手の外科学に興味を持ちました。その後文部省短期在外研究員としてアメリカに留学する機会を得ましたがこの時、山内裕雄順天堂大学名誉教授の紹介状をいただきNYコロンビア大学Prof. R. E. Carrol, Mayo Clinic Prof. R. L. Linscheidを訪問することができました（紹介状の中で私のことをmy friendとしたためであったようで、私のあまりの語学力の無さに本当かと質問されました）。

その後学会運営にも参加させていただきました。生田義和会長の時、広報担当理事である矢部 裕名誉教授の下、初代広報委員会委員長を仰せつかりました。これが広報活度の始まりでその後、田中寿一先生のような優秀な後継者に恵まれ、学会の中でも活発に活動している筆頭に列せられる委員会になっています。

第41回日本手の外科学会 玉井 進会長の時、まさに日本手の外科学会の一大変革期を迎えました。理事長制導入、事務局の公的施設からの移転など学会運営発展に関しての根源的変革、将来構想構築が議論され、玉井 進会長の下、私がおの基本となる定款等検討委員会委員長を命ぜられました。私は当時総合病院の院長職であり、極めて多忙な日々でこのような重大一大業務を遂行できるか全く自信はありませんでした。しかし幸いなことに当時は専属の院長秘書がついていましたため、業務を何とかこなしてきました。結局最終的には第42回日手会会長 故藤巻悦夫先生の主導、指揮のもと立派な定款ができあがりました（藤巻先生は学会定款改訂に8回のキャリアがあり、先生なくして成就不可）。事務局移転に関しても色々な思いが浮かびます。長年事務局としてお世話になりました九州大学から民間のヒズ・ブレインに移転しましたが、評議員の皆様へのアンケート調査を行い、財団法人日本学会事務センターとは僅差でヒズ・ブレインに決定しました。ヒズ・ブレインの機能、信頼性に関しての一抹の不安はありましたが理事会、評議員会で激論の上承認され現在に至っています。しかし先の日本学会事務センターの公金使い込み、横領の事件があり多くの学会が大変な被害を受けましたが、日手会は無事で我々のあの時の判断は間違っていなかったと胸をなでおろしています。なお現事務局に対する評価は色々あると思いますが、学会は大変活性化され、コンピュータ化され、広報活動も充実されてきたと感じているのは私だけではないと思います。当時の重大な事業に携わった私にとっては感無量です。ただ、現状では事務処理が多くなりマンネリ化傾向が見られ、会員の方々から時に批判も出ています。事務局の方も初心を忘れず学会発展のために頑張ってご協力していただきたいと、当時の動き、流れに関与したものとしての切なる願いです。微力ながら本学会の大切な節目、改革の時期に極めて重要な役目を頂いたことは大変光栄であり心から感謝しています。

今年度から、日本手の外科学会専門医制度も確立され、我々手の外科医にとっても、また一般市民、患者さんにとっても大変有意義であり福音と思います。微力ながら私も応援しますが、今後日本手の外科学会が益々発展されることをお祈りしています。

## 日本手の外科学会特別会員になって

吉村整形外科医院  
吉村 光生

特別会員にご推薦いただき誠に光栄に存じます。何よりも誇りに思われます。と同時についそんな年齢になってしまったのだというのが実感であります。手の外科に長年関わってきましたが楽しい思い出ばかりで、本当に良かったと思っています。一番自分が適応できた領域というべきでしょうか。手の外科を通して仲間にも恵まれました。手の外科の人達はとても仲が良いグループでもあります。

メスをいつまでも捨て切れなくてまだ握っている。手術をやめるべき時期が来たら自分で自覚できるかどうか自信がない。手の外科は座って手術することが多く、年齢が高くなっても苦にならず、手術用顕微鏡やルーペを使用することで目の衰えもカバーできる。若い手の外科医の邪魔をしないように、恥ずかしながら今しばらく手術を続けられたらと思っています。内視鏡の使用もマイクロとあまり差がなく、自然に入っていきます。

マイクロを利用した切断指の再接着術や遊離組織移植術、リンパ管の手術も続けていますが、苦にはならず楽しんでます。手の外科の専門性は非常に深く、治療に対するゴールも高いレベルに設定し、機能だけでなく、美容的にも、cost performanceまで考慮したものでありたいと願っております。手の外科をさらに深く追求するのも一つかも知れないが、肘や肩への関心を伸ばして行くのも一つと思っています。

今は2008年7月に福井市で開催する第21回日本臨床整形外科学会の会長として準備を進めています。ほとんどの学会は週日に開催され開業医が参加する場合、休診とするか代診をお願いするなど困難が伴います。学会の開催を海の日を含めた連休に設定することにより、多くの参加が可能になります。しかしこの学会の飛躍的な発展の為には、多数の演題応募と学会参加が必要であります。福井での学会が試金石と見られていますので張り切らざるを得ません。そのために手の外科関係の仲間の皆様のご協力をお願いするしかありません。

### .....新評議員紹介.....

麻田 義之 (あさだ よしゆき)

日本赤十字社和歌山医療センター整形外科



この度、伝統ある日本手の外科学会評議員に選出いただきましたことは、身に余る光栄と存じます。

私は昭和59年に京都大学を卒業後、大学および関連病院で、整形外科全般の診断、治療を研修させていただきました。この間、切断指や腕神経叢損傷等の上肢外傷の治療に携わる機会も多く、手の外科に興味を持つに至りました。平成7年、京都大学に帰還後は手の外科班の一員として診療に従事するとともに、中村孝志教授のご高配により、マイクロサージャリーの技術を応用した脊髄・末梢神経再生の研究を行う機会を得ました。現在は、種々の上肢外傷から、関節ウマチ、変性疾患等、広範囲な診療に力を注いでおります。今回の事は、まだまだ未熟な私に対し、「一層、努力せよ!」という激励の意味と考えております。今後は、後進の指導・育成、本学会の発展に僅かでも貢献できるよう精進してまいる所存でございますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

**稲垣 弘進** (いながき ひろのぶ) 豊田厚生病院整形外科



このたびは伝統ある日本手の外科学会評議員に選出していただき大変光栄に存じます。

私は平成3年に香川医科大学を卒業後、名古屋大学整形外科に入局しました。研修医時代に井上五郎先生の鮮やかなメス捌きを見て大変感動し、手の外科に興味を持ちました〈鮮やかな手の外科〉。KKR 東海病院では鈴木正孝先生に手の外科の基礎だけでなく、手・膝・肩の関節鏡視下手術などをご指導いただくとともに、医師としての取り組み方など多方面にわたり教えていただきました〈妥協しない手の外科〉。その後名古屋大学手の外科に帰局し、中村蓼吾先生のもとで舟状骨偽関節をはじめとした手関節疾患について研究させていただくとともに、手の外科疾患全般にわたってさらに詳細なご指導をいただきました〈奥の深い手の外科〉。現病院では主に上肢の外科の診療を担当していますが、今後〈どのような手の外科〉にしていくべきか模索中です。若輩者ではありますが本学会の発展に少しでも貢献できるよう努力いたしますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

**大谷 和裕** (おおたに かずひろ) 近畿大学整形外科



このたびは日本手の外科学会評議員にご推薦いただき、大変光栄に存じます。私は昭和62年近畿大学卒業後、近畿大学整形外科に入局しました。研修医時代に当時の梁瀬義章助教授に手の外科のご指導を受けたのが始まりで、平成7年に保協淳之先生の指導のもと縫合した指動脈が無事に開通したときの感激が忘れられず手の外科に興味をもち始めました。その後は、広島や新潟の手の外科講習会をはじめとする講習会で研修させていただき、さらに西奈良病院手の外科マイクロサージャリー研究所 玉井 進先生のところで臨床の指導を受け現在に至っております。現在、近畿大学では外傷、変性疾患、末梢神経まで上肢

の外科を専門に診療させていただいております。

手の外科に関しては経験も浅くまだまだ初心者ですが、今からがスタートラインと思い研鑽していく所存です。微力ではありますが日本手の外科学会の発展に少しでも貢献できよう努力いたしますので、ご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

**近藤 真** (こんどう まこと) 北海道整形外科記念病院



私は平成元年北大医学部を卒業し、北大整形外科に入局しました。金田教授のもと、初期研修を行いました。その際三浪明男先生、加藤博之先生に上肢疾患の楽しさ・難しさを叩き込まれ、上肢を専攻するに至りました。手舟状骨の不顕性骨折や橈骨遠位端骨折後のEPL皮下断裂、野球選手の肘部管症候群などの研究をさせていただきつつ、平成7年から平成9年には北海道整形外科記念病院で三浪三千男、加藤貞利両先生に上肢疾患について特に臨床面のご指導をいただきました。平成16年より現在の北海道整形外科記念病院にて手のみならず肩、肘関節を含め上肢疾患全般を担当させていただいております。

この度は日本手の外科学会評議員に選出いただき大変光栄に存じます。若輩者ではございますが、北大医学部野球部で培った根性でさらに精進し、微力ながら本学会の発展に貢献できればと思っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 南野 光彦 (なんの みつひこ)

日本医科大学武蔵小杉病院整形外科



昭和63年に日本医科大学を卒業し、同整形外科に入局しました。平成6年、大学院で筋電図の研究で学位を取得後、財務省東京病院整形外科の医長として勤務しました。平成10年、日本医大付属病院に復帰し、澤泉卓哉先生のご指導をいただき、平成12年、日本医大多摩永山病院に配置換え、平成13年、新潟手の外科研究所の吉津孝衛先生、牧 裕先生、坪川直人先生の下で研修をさせていただきました。平成17年、聖マリアンナ医大別府諸兄教授のご紹介で、米国テキサス大学ガルベストン校手の外科に1年間留学し、手関節の3次元的靭帯解剖と運動解析の研究をいたしました。平成18年より日本医大武蔵小杉病院で

手の外科を中心に診療を行っております。

この度は伝統ある日本手の外科学会評議員に選出していただき、大変に光栄に存じます。今後は日本手の外科学会の発展に貢献できますよう尽力いたす所存ですので、何卒宜しくお願い申し上げます。

## 長谷川健二郎 (はせがわ けんじろう) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 形成再建外科



この度、日本手の外科学会評議員に選出いただき、大変光栄に存じます。

手の外科・マイクロサージャリーに興味を持ったのは、川崎医科大学就任中の山野慶樹先生にご指導いただいたのがきっかけです。大学院修了後、National University of Singapore の R. W. H. Pho 教授の下に1年間留学し、その後、光嶋 勲先生(岡山大学就任時)、吉津孝衛先生・牧 裕先生・坪川直人先生(新潟手の外科)、津下健哉先生・木森研治先生(広島手の外科)の下で1年間の国内留学をさせていただきました。平成18年4月に川崎医科大学整形外科より木股敬裕教授のおられる岡山大学形成再建外科に移り、以前にも増して岡山

県下の再接着・手の外科・再建外科症例を経験させていただいております。微力ではありますが学会の発展に貢献できる様努力して参りますので、今後とも、諸先生方のご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

## 松崎 浩徳 (まつざき ひろのり)

燕労災病院整形外科



この度は伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出していただき、大変光栄に存じております。

私は平成2年に山形大学を卒業後、ただちに新潟大学整形外科に入局しましたが、田島達也名誉教授退官直後の当時、教室に残存していた「手の外科の熱気」にふれ、また関連病院で外傷中心の初期研修を行う間に多くの個性あふれる諸先輩の薫陶をうけ、気がつけば手の外科の門をたたいていました。その後新潟大学で柴田 実教授、新潟手の外科研究所では吉津、牧、坪川先生のもとで手の外科の研修を行い、平成16年からは米国セントルイスの Washington

University で Dr. Gelberman のもとで屈筋腱修復に関する基礎研究を行いました。現在は燕労災病院に整形外科部長として勤務し、多くの労働災害による手指外傷の治療を担当しております。

今後も手の外科分野の進歩、本学会の発展に微力ながら尽くしていく所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

## ハンドギャラリー(児島コレクション)IX 芸術作品としての手 その2

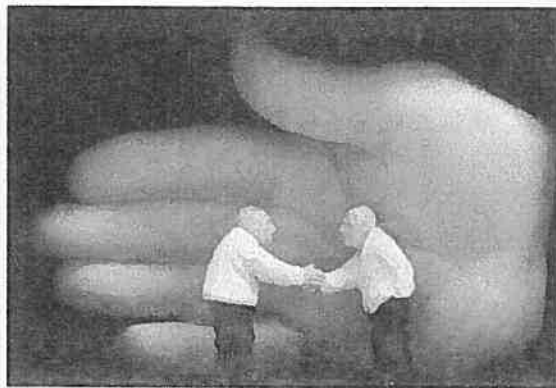
埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

児島忠雄

手は彫刻家にとって主要なモチーフの一つであることは前回のロダンについて述べさせていただきました。手は木彫家にとっても同様です。

今回は現在、スイス、ドイツを中心にヨーロッパで活躍されている Werner Baum さんを紹介いたします。Baum さんは1940年、スイスのBaden生まれのスイス人です。Brienzの木彫家のための大学(Fachschule für Holzbildhauer)、次いでBernの美術工芸学校を卒業後、いろいろな多くの木彫作品を製作発表し、活躍しています。最近では、より現代的な表現に幅を広げています。

バーゼルの美術工芸店で“Unter der Hand”と題する額縁入りの彫像作品に魅せられ、求めました(写真)。大きな手の平の下で、二人のお年寄りが、にこやかな笑みを交わし、握手している姿に思わず微笑みます。温かみのある大きな手守っているようです。このように、Baum さんは日常生活のなかで、ユーモアに富んだ心温まる作品を多く手懸けているようです。



## 第7回アジア太平洋手の外科会議へのご招待

水 関 隆 也

過日の米国手の外科学会のゲストサイエティープログラムが会員の皆様のご協力のおかげで成功裏に終わりました。厚くお礼申し上げます。その余韻覚めやらぬ今日この頃ですが、次なる学会のご案内を申し上げます。既に日手会ホームページでは関連学会の項目に掲載しておりますが、第7回 Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Handが来年2月14～17日、香港手の外科学会の主催にて開催されます。21回香港手の外科学会に引き続き開催となります。

説明するまでもなく、香港手の外科学会は会員数に比して非常に活動的で、日本手の外科学会とは定期的に fellow を交換するなど縁の深い学会です。個人的に交際のある会員も多いのではないのでしょうか。2006年、バンコクで行われた第6回 APFSSH の際に感じた7回 APFSSH にかける彼らの意気込みには特別なものがありました。日本からできるだけ多くの会員に参加して欲しいとの依頼を受けています。2月中旬という真冬時ですが、避寒を兼ねて、ご家族でのご参加はいかがでしょうか？ 事前登録は11月30日までで US \$ 450 となっております。なお、プレ・ポストコンgressも企画されているようです。詳細は URL <http://www.mvdm.com/apfssh/> まで。学会長の Ip 先生の挨拶文を許可を得て掲載します。

多くの会員の参加を期待いたします。

### Ip 会長の挨拶文

It is our great honor to invite you to attend the 7th Congress of Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand 2008 in Hong Kong, from February 14 to 17, 2008.

As Asia's world city, Hong Kong is famous for its diversity and sophistication. Featuring a unique mix of Eastern and Western cultures and contrasting splendours of city, harbour and unspoilt countryside, the city offers rich heritage and traditions, wonderful shopping, superb dining, and exciting entertainment. Together with the state-of-the-art event facilities and infrastructure and world-class hotels at competitive prices, the city is an ideal international event destination.

We are fully committed to organizing the 7th Congress of Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand in 2008. You will be impressed by our renowned hospitality coupled with the world-class facilities and professional service standards.

Should you accept our invitation, please make your registration as soon as possible. The early bird registration discount will be finished on 30 November 2007. Please also visit the official website [www.apfssh2008.org](http://www.apfssh2008.org) for the latest information of the congress. It will certainly be our pleasure and honor to see you in Hong Kong!

If you have any further questions regarding this invitation, please do not hesitate to contact the Congress Secretariat at tel: (852) 2735 8118 or via fax: (852) 2735 8282 or email: [apfssh@mvdm.com](mailto:apfssh@mvdm.com)  
We sincerely thank you for your time and hope to see you in Hong Kong soon!

## ランチョンセミナー「手の外科における保険診療」および 診療報酬に関する評議員アンケート結果についての報告

平成19年4月27日に行われましたランチョンセミナー「手の外科における保険診療」の際に行わせていただいたアンケート結果と、その後評議員の先生方にご協力いただいた、診療報酬に関するアンケート結果についてご報告させていただきます。

### 1. ランチョンセミナー「手の外科における保険診療」について

196名の会員（卒後年数平均19.6年）から協力をいただきました。講演内容、聞き取りやすさ、時間については概ね良好でした。スライドの大きさについては「読みにくかった」との回答が約2割弱あり、これは会場のスクリーンが小さかったことが原因と思われました。レジュメについては「内容不足」との回答が約2割ありました。本セミナーを「同僚にすすめるか」については、ほとんどの会員から「すすめる」との回答をいただきました。今後の講習会企画については、保険診療に関する基礎的講義と、具体例の解説を行うQ&Aを同程度の時間をかけて行って欲しいとの回答が最も多かったようです。その他の意見・要望として、スライドをレジュメに載せて欲しいとの意見を複数いただきました。また新術式登録から外保連試案に載せるまでのしくみが知りたいとの意見もいただきました。今回のアンケート結果からみましても本セミナーは会員に有益な情報を提供できていることが再認識されましたが、お寄せいただいたご意見を参考にして、さらに会員にとって有意義なセミナーになりますように、努力してゆきたいと思えます。なお今後はさらに多くの若い会員にも参加いただいで、保険診療について勉強していただければと思えます。

### 2. 診療報酬に関する評議員アンケート結果について

41名の評議員から回答をいただきました。様々なご意見をいただきましたが、複数意見として挙げられたものとして、①手術・処置・検査に関して該当術式が見当たらないものとしては、伸筋腱脱臼の修復術、術中透視・造影の加算、（有茎）血管柄付き骨移植術などがありました。このうち伸筋腱脱臼の修復術についてはすでに、新規術式として申請中です。また術中透視・造影の加算については、日整会から申請を行っている状況です。②不当に手技料が安いと感じる手術、処置、検査などとしては、伸筋腱縫合術、指節骨の手術、先天異常の手術、肘靭帯縫合手術、第一肋骨切除術、TFCC切除・縫合術などの手術と、上肢伝達麻酔、腱鞘内注射などがありました。③DPCに関して不具合を感じる場所としては病名、選択できる手術名が少ないなどがありました。④その他意見としては、重度手根管症候群に対して腱移行の加算を認めて欲しいという意見や、Sauvé-Kapandji手術など関節形成術の定義があいまい、手の外科領域は全体的に手技料が安いとの意見がみられました。このうち手根管症候群に対しては、手根管開放術と腱移行術を同一手術野における複数手術の加算要望の第一希望として、昨年度に日整会を通じて提出しています。また関節形成術にどのような手術が含まれるかについての日手会の見解は、平成18年度の全国整形外科保険審査委員会議の資料へ掲載されており、その詳しい内容は委員会報告として日手会ニュース第28号へも掲載されていますので、確認いただければと思えます。その他にも貴重なご意見をいただきましたが、これらの結果を尊重して、今後の社会保険等委員会活動を進めてゆきたいと思えます。ご協力誠にありがとうございました。

（文責：社会保険等委員会 委員長 野口政隆）

## 〈〈〈〈専門医制度に関する事務局からのお知らせ〉〉〉〉

専門医特例申請も2回目となり、ずいぶんと落ち着いてまいりました。専門医制度に関する今後の予定などについて、簡単にお知らせいたします。

### 1) 専門医特例申請について

本年10月末日をもって、第2回目の特例申請受付を締め切りました。平成20年度は、最後の特例申請を10月1日から31日の間、受付を行なう予定です。資格を有しておられる方は忘れずに申請してください。詳細は来年の夏ごろホームページ上でご案内します。

### 2) 認定研修施設の申請について

認定研修施設は、専門医申請と異なり、特定の受付期間を設けることなく随時事務局で受け付けております。ただし審査は年3回(3月、6月、12月)に行いますのでご承知おきください。また、専門医の異動があった場合には速やかに事務局宛お知らせくださいますようお願いいたします。

### 3) 教育研修講演の認定について

学会、研究会等で行われるシンポジウム、パネルディスカッションなどは認定されません。ただし、日手会学術集会において行われるものについては認められることとなりました。

### 4) 専門医試験について

第1回目の専門医試験は、平成21年4月の実施を目指し、現在鋭意準備を進めております。

## 『DVD 手の外科シリーズについて』

戸部 正博

前回の日手会ニュースでも少し触れさせていただきましたが、今年の4月に日本手の外科学会50周年を記念して、今までの『手の外科シリーズ』パンフレットNo.1~24の中から日常診療の中で使用される頻度が高い疾患を抜粋し、DVD化いたしました。

内容は手根管症候群・ドケルバン病・バネ指・ヘバーデン結節・ガングリオン・マレット変形・テニス肘・肘部管症候群・舟状骨骨折・爪周囲炎・屈筋腱損傷・橈骨遠位端骨折・母指CM関節症・キーンベック病・手の手術を受けられた方への15疾患です。ナレーションはDVD制作に当たった株式会社テージ社長令嬢の国井美佐さんが担当しており、彼女は来春より北海道放送の女子アナに内定しております。また、アニメーションはA.e.Suckさんという日本のフラッシュ・アニメーション製作の第一人者をお願いしております。彼はCS放送でもおなじみのダイナミック・カトゥーンの製作を担当されている方で、まったく手の外科になじみがないとは思えないくらい、すばらしい出来となっております。特にバネ指のバネ現象のアニメーションは特筆ものです。

先日、アメリカ手の外科学会の広報ブースに立ち寄った際に、手の外科の疾患別のパンフレットは多数ありましたが、DVDのような映像で流れる患者さん向けのグッズはありませんでした。おそらく、患者さん教育用のDVD製作は日本が世界に先駆けて行っているのではないかと思います。既に、非公式ですがお隣の韓国からハンゲル化出来ないかとの問い合わせもありました。

現在、使用していただいている先生方からは大変好評で、中には大学の授業で流していただいている先生もいらっしゃると思います。まだ、ご覧になっていない方は来年の日手会でも上映する予定ですので、お早めにお求めください。

## 日本手の外科学会第14回春期教育研修会のお知らせ

日 時：平成20年 4月19日(土) 8:30～15:30

会 場：エポカルつくば (つくば国際会議場)

参加費：5,000円 ※受講単位が不要な場合でも、参加費の納入は必要です。

申請予定単位：日本手の外科学会、日本整形外科学会、日本形成外科学会

予定プログラム (講師あいうえお順)

- |                           |         |                  |
|---------------------------|---------|------------------|
| 1. 音楽家の手の障害               | 酒井 直隆先生 | 宇都宮大工学部 (横浜市大整形) |
| 2. Volkmann 拘縮            | 砂川 融先生  | 広島大学医学部整形外科      |
| 3. 尺骨 Plastic Deformation | 高原 政利先生 | 山形大学医学部整形外科      |
| 4. Kienböck 病             | 中尾 悦弘先生 | 中日病院手の外科         |
| 5. 手の先天異常                 | 福本 恵三先生 | 埼玉手の外科研究所        |
| 6. スポーツによる手関節痛とテニス肘の最近の知見 | 別府 諸兄先生 | 聖マリアンナ医科大学整形外科   |

## 編集後記

本年度より広報委員を拝命し、早速、日手会ニュースを担当させていただきました。現在、広報委員会では、手の外科パンフレットの改訂、ホームページの充実、などに取り組んでおります。広報委員の一員として、少しでも日手会会員の皆様のお役に立てるように努力してゆきたいと思っております。よろしく願いいたします。

年末に向け、ご多忙の折、ご自愛の上、よいお年をお迎え下さい。

(文責：佐藤和毅)

広報委員会

(担当理事：田中寿一 アドバイザー：藤澤幸三、堀内行雄、柳原 泰 委員長：青木光広 委員：香月憲一、佐藤和毅、砂川 融、副島 修、戸部正博、藤岡宏幸)